

コラム

招聘研究員レポート

名前	所属	招聘期間
蘭 曉敏	華東師範大学 対外外語学院 博士課程	2015年9月27日～2015年10月17日
Simonia Fukue Nakagawa	サンパウロ大学 日本文化研究所 修士課程	2015年11月2日～2015年11月22日
鄧 苗	北京師範大学 民俗学与文化人類学研究所 博士課程	2015年11月30日～2015年12月19日
謝 咏	浙江工商大学 東亜文化修士課程／日本文化研究所所長補佐	2015年12月6日～2015年12月25日
Marine PENICAUD	フランス東アジア文明研究センター研究員	2016年1月8日～2016年1月27日

もし川が枯れてしまったら、魚は棲息し続けられるのか？

—中日の伝統的な地方曲芸における生き残りの窮状について—

蘭 曉敏
(華東師範大学)



世界各国の優秀な伝統曲芸は、無形文化財を保護する背景の下で次第に注目を浴び、重視されるようになった。しかし、社会が発展し人々のライフスタイルが変化することにつれて、我々は無形文化財を保護するために、幾多の想像を超える困難と窮境に直面することは免れ得ない。

無形文化財は伝統的な文化であり、さらに民族文化の精髓と言っても過言ではなかろう。それを古来から脈々と流れる歴史の川に例えたとすれば、川に棲息する様々な種類の魚は、それぞれ独自の文化（伝統的な地方曲芸）を表すものと捉えることができる。視点を変えてみると、曲芸の範疇から見れば、一種類の魚は一種類の伝統的な地方曲芸を表せる。そしてそれらの伝統曲芸は長い期間を経て発展と変化を遂げてきた。自然環境と生態環境が変わった今の時代に、水が汚染されたり、川が枯れたり堰き止められたり、あるいは改造されたりした場合、そこに棲息する魚たちはいかなる運命をたどるのだろうか？

ある魚の群れが時代の流れに沿って、絶えず自身の形態を進化させることで社会の環境に適合した。したがって、新たな環境に成長し続け、脚光を浴びるようになったのである。その一方で、また別の魚の群が時代の発展と同調できず、都市化の過程で適応しなくなり、止むを得ず生存の危機に陥った。また、社会に受け入れられず、時代遅れになって消え去っていく魚の群もあった。この魚の理論は、今の伝統的な地方曲芸における生き残りの窮状を生々しく反映している。

中国は曲芸の大国である。様々な曲芸は各地域で広範囲に分布し、それぞれ悠久たる歴史を持っている。曲芸の種類がとても豊富な上に、大衆とのつながりが深く、芸術的な価値があると考えられる。残念なことに、数多くの地方曲芸はかつて人気を博したものの、今では、人々

の関心は薄れ始めている。筆者は実地調査を通して、中国初の「中国の曲芸名城」の山西省長治市にある伝統的な地方曲芸についても、様々な存続問題があることに気付いた。次に、中国の重要無形文化財目録に収録されている「襄垣鼓書」を例に挙げよう。

「襄垣鼓書」は明末清初山西省に発祥した、地方の曲芸の一つである。スケールは他の曲芸より比較的大きく三百年以上の歴史を有し、演じ手は主に盲人で、説唱の形式で



写真1 目の不自由な芸人が襄垣鼓書を演じる様子
(中国山西省長治市襄垣県非物質文化遺産体験館・2015/08/19撮影)



写真2 襄垣鼓書を見に来た観衆たち
(中国山西省長治市襄垣県大黒溝・2015/08/19撮影)



行われる。それは、目の不自由な芸人が一人で楽器を演奏しながら歌うことになっている。特に一人で七種類の楽器を演奏することは、鋭気があり、非常に際立っている⁽¹⁾。

残念なことに、このような独特な風格を帯びる伝統的な地方曲芸を演じる芸人の数は今では三十人以下になってしまった。そのうえ弟子を募集しても誰も学びに来ないということが、「裏垣鼓書」の伝承における最大の問題である。また、観客層をみてもやはり年寄りの方が多い。

この状況は中国だけでなく、日本の伝統曲芸調査にも同じことが言える。筆者は日本滞在中、横浜三溪園の琵琶演奏会に行った。また、東京の国立能楽堂、浅草演芸ホールなどの伝統曲芸を上演する場所で実地調査を行った。気付いたことはまず観客の人数が少ないこと。また、観客層は年配者が多いことである。それらのことから伝統的な曲芸は若い人たちにそれほど受け入れられなくなったことが分かった。

中国であれ日本であれ、伝統的な曲芸における発展の見込みはいずれも楽観視できない状況になっている。伝承者の高齢化や、後継者不足の問題はとても深刻で、さらには曲芸の大衆的受容も希薄になってしまった。これら



写真3 浅草演芸ホールで上演した日本の伝統的な曲芸
(東京の浅草演芸ホール・2015/10/04撮影)

の問題を解決しない限り、かつて我々の生活に深い影響を与えた貴重な無形文化財はみるみるうちに消えてしまう運命にあるだろう。問題の解決は決して容易ではないが、高齢化、都市化の問題を抱えた今、「一刻を争う事態」と認識し、無形文化財の保護に早急に取り組むことが必要であると、筆者は考えている。

[注]

(1) 王 徳昌『裏垣鼓書精品匯集』、政協襄垣県委員文史委、襄垣県文化服務中心編印、序。

日本の文化、現代美術、マンガ探究



Simonia Fukue Nakagawa
(ブラジル サンパウロ大学 日本文化研究所)

この調査は、非文字資料研究センターの訪問研究員制度により、日本の美的価値観といえる「カワイイ」と「バサラ」の関係を、日本の現代美術家の奈良美智と村上隆の二人の作品から導き出したものである。



写真1 村上隆 個展「円相」、Kaikai Kiki Galleryにて
撮影：シモニア・フクエ

私は以前、2004年から2005年の間日本に住んでいたことがあったが、その頃と比べると、観光地や公共交通機関の案内にローマ字や英語の説明が加えられるなど大きく

変化していることに気付いた。そのことは単に日本が変わったというだけでなく、グローバル化によって、インターネットでの情報アクセスが容易になり、より多くの世界の人々が日本のポップカルチャー、特にアニメやマンガの虜になり始めたためと説明することができる。まさしくこれは、私が研究者として日本に戻ってきた理由の



写真2

Blum & Poe Tokyo ギャラリーでは奈良美智の作品を撮影することはできなかった。その後研究の合間に奈良美智が手掛けたカフェに立ち寄ったが、私の知っている作品は撤去されたり作者の元に返されたりしてしまっていた。

一つでもある。

21日間で行う研究の内容は前もって明確に決めていた。「カワイイ」と「バサラ」について、現代美術家の村上隆と奈良美智について、マンガについて (将